

レヴァント回廊の歴史を探る

—第9次(2023年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査—

西山 伸一 中部大学人間力創成教育院教授

ジャニン・アブドゥル＝マッシーハ 国立レバノン大学・文学人間科学学部芸術・考古学科教授

Investigating the History of the Levantine Corridor: The Ninth Season (2023), The Excavation of Phoenician Port of Batroun, Lebanon

NISHIYAMA Shin'ichi Professor, School of General Education, Chubu University

ABDUL MASSIH, Jeanine Professor, Department of Arts and Archaeology, Faculty of Letters and Human Sciences, Lebanese University

レヴァント回廊の歴史を探る—第9次(2023年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査—

1. はじめに

レバノン共和国の地中海沿岸、ビブロス(現在のジュベイル)からトリポリ(現在のタラーブルス)の中間地帯に位置するバトルーン遺跡の調査は、2023年度はレバノン政府文化省考古総局の監督のもとレバノン大学側が中心となって実施された。中部大学側は、調査資金や学術的アドバイスなどの支援を行った。調査は、今回もバトルーン旧市街の開発に伴って実施された緊急発掘調査である。調査は、2023年10月14日に始まり、12月20日で一段落した。その後、2024年1月23日より再開され、3月頃まで断続的に実施される予定である。

レバノンでは、コロナ禍は落ち着いたものの、2023年10月より始まったイスラエルとハマスのガザ地区における戦闘の影響を受け、日本の外務省は、10月20日にレバノン全土の危険情報をレベル3に引き上げた(南部の国境地帯はレベル4)。このため、大学機関から現地への渡航は困難となっている。この状況は2024年1月現在も継続している。実際には、南部の一部を除き、レバノン国内は比較的安定した状態であると現地から聞いている。このような状況で、バトルーン遺跡の調査は実施されている。

今回の調査は、バトルーン旧市街の中心部に位置するオスマン朝時代後期に建造されたというシタデル(城塞)(Qalat al-Batroun)の南西に位置する土地において住宅の立て替えに伴い実施された。今回の調査で主に出土したのは、十字軍時代(11~13世紀)からオスマン朝時代(16~19世紀)の文化層ならびに建築遺構である。特に十字軍時代については、バトルーンに

関する考古資料はほとんど報告されておらず貴重な資料を提供することとなった。

2. K 地区

この調査区は、バトルーン遺跡の中央に位置し、2021年に発掘したI地区の約100m北にある(図1)。上述のシタデルは調査区の北東にあり、「牧場の聖母」教会(Our Lady of the Yard Church)が東に位置している。番地としては1304番であり、調査面積は、約300m²である。

表土直下には、19世紀のオスマン朝時代末期の住宅の基礎があり、その下からさらにオスマン朝時代の建築遺構が出土した。まず、調査区の北西部では、砂岩で構築されたヴォールト構造をもつ構造物が検出された。これは、水槽(シスターン)(長辺約2m)であり、最末期には、ヴォールトに穴が穿たれ、そこから取水したものと思われる。この構造物の南北に走る壁は、調査区の西に位置する住宅と並行なため、この隣の住宅もオスマン朝の構造物をその下に持つと考えられる。出土遺物はわずかな土器片であり、現代の遺物も多く混じっていた。

上記のシスターンの南には現代の遺物を含むひどくかく乱された層が広がっており、現代のゴミ穴も多く検出された。

調査区の西部では、この調査区のメインの建造物が発見された。まず、調査区の西側で南北に走る幅約75cm、長さ約10mの石組み壁が現れた。この壁を利用したコの字型の石組み壁が調査区の中央西よりの場所で出土した。全体としてこの建造物は、方形を呈しており、南北350cm、東西390cm、残存高約



図1 バトルーン遺跡と調査地区の分布。中央部左手にK地区が位置する。K地区は、推定されるテル(マウンド)型遺跡の南端部に位置する。

50 cm を測った。この遺構は、おそらく、西側の壁に付属する「塔」のような構築物であったと考えられる(図2)。この塔は、少なくとも二度の改築を経て、西側の壁と接続するようになったと思われる。

この塔は、後の時代に、工業用施設へと改築された。塔の内部の250×250 cmの空間には、直径約2 mの円形の窯が設けられていた(図3)。内部の北側と東側の壁は増築され、約46 cmの厚さの壁となった。窯は、北半部のみが残存し、南側は、後世のかく乱により破壊されていた。窯の内部には、焼土、石灰、石灰石および褐色の砂が検出された。この窯は、出土遺物からオスマン朝時代後期のものであると考えられる。

窯の北側の壁の東よりには、幅約110 cmの凹みがあり、おそらく煙突と考えられる施設があったと考えられる。南側の壁は上述したようにかく乱により破壊されていたが、崩壊した石を除去したところ、南北に平行に走る2本の壁(幅約70 cm)が見つかった。また覆土からは、タイル片が回収された。これらのタイルはおそらく窯の床面を形成していたものと考えられる。床面は上述した2本の平行に走る壁の上に構築されていたと思われる。窯の東側外の覆土からは、十字軍時代の陶器を含む中世の土器片が回収された。



図2 K地区で出土した建築遺構全景(UAVによる撮影)。「塔」のような建造物は、左手下に見える。写真左が北。



図3 「塔」を再利用して作られた窯(UAVによる撮影)。窯の底に東西に走る2本の壁が見える。写真左が北。

塔と窯の調査後、調査区を南と東に拡張した。南側では、方形の建造物が出土した。内部は、現代のかく乱により大きく破壊されていた。上述の窯に接続する部分では、床面近くで焼土や灰を含む層が確認された。おそらく窯を使用した際に窯から取り出した灰などがたまった場所と考えられる。また、窯の東壁と接続する南北に走る幅約110 cmの壁が見つかった。この壁は、窯から約4.4 m南で東西に走る壁に接していた。この東西の壁は、上述した調査区の西側を南北に走る壁とつながっていた。

この窯の南側で検出された方形の建造物は、少なく



図4 K地区「塔」周辺の建造物：第1期。

とも2時期にわたり構築されたことが判明している。最初の第1期には、方形の壁が東西および南側に構築され、空間への入口は西側に位置していた(図4)。おそらくこれが「塔」跡から窯を構築した際の前室であろう。その後に構築された第2期の壁は、西側の入口が2カ所に改築され、さらに南壁が約1m南に移動した(図5)。おそらく内部は二つの空間に区切られており、それぞれの部屋の大きさを均等にするために、南壁がさらに南に移動したのだと思われる。

調査区をさらに東に拡張したところ、幅約70cm、長さ約750cmの石組みによる東壁が出土した。これはオスマン朝時代後期の壁であり、全体として、この調査区で出土した上述の窯のある部屋を取り囲む壁が存在することが明らかになった(図6)。すなわち、オスマン朝時代後期には、窯のある空間は、一辺が7~8mある石組み壁に囲まれた部屋になり、おそらく工房として機能したのだと思われる。この時期には、入口は、南壁に開けられ、以前の西壁の入口は完全に閉鎖された。また、この方形の部屋の北東部には、かく乱やピットにより破壊されていたが、「塔」の北側の壁と上述の東壁が接続する部分があったと思われる。

調査区では、さらに2カ所の試掘トレンチを設定した。一つは上述の東壁から東に約3m延びるトレンチ(東トレンチ)、もう一つは、「塔」の北壁から北に約1.5m離れた所に北壁と並行に走るトレンチ(北トレンチ)である。いずれのトレンチも幅は約1mであった。

東トレンチは、上層のかく乱層を取り除くと褐色の文化層が現れた。この層からは大量の十字軍時代(11~12世紀、および15世紀)の施釉陶器を含む土器が出土した(図7)。またこの層には多量の炭化物およ

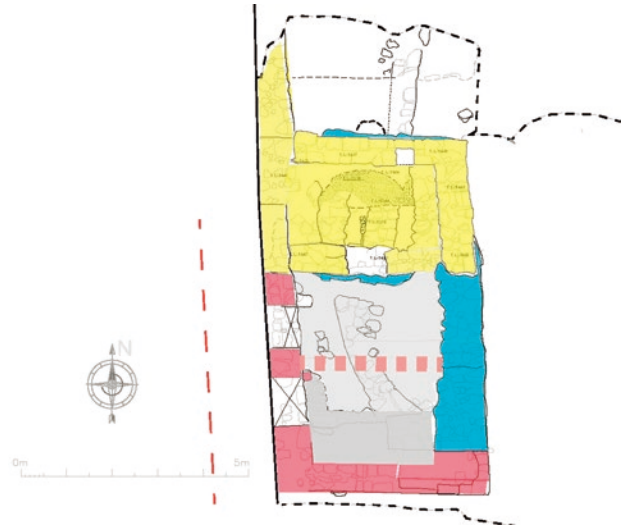


図5 K地区「塔」周辺の建造物：第2期。



図6 K地区の「塔」周辺の建造物：オスマン朝時代後期。



図7 K地区の試掘(東トレンチ)から出土した十字軍時代の施釉陶器。



図8 K地区の試掘(北トレンチ)の底から出土した水路のような切石(西から)。

び石灰片が含まれていた。トレンチの深さは地表面より2mに達したが構造物は発見できなかった。

北トレンチは、大きなピットを検出し、その下から石組み遺構が出土した。この遺構は、水路のような形態をしており、長さ約115cm、幅約25cmを測った(図8)。またこのトレンチの南端では、「塔」の北面が出土したが、アーチのような構造を持つことが判明した。

この調査区で出土した遺物としては、オスマン朝時代の土器、施釉陶器、磁器、および十字軍時代の土器、施釉陶器が主なものとしてあげられる。

3. 十字軍時代のバトルーン

今回の調査の最も特筆すべき点は、バトルーン遺跡における考古学調査で初めて明確な十字軍時代の文化層に到達したことである。これまで文献史料から十字軍時代の居住は知られていたが、考古学的に明らかにしたことに意義がある。その十字軍時代だが、文献史料においても詳しい状況は分かっていない。

十字軍時代のバトルーンは、「ボトルム」と呼ばれ、Recueil des historiens des croisades(RHC)によれば、町の城壁は脆弱で家々の壁を利用して町が防衛されていたようである。また、町の中央にはシタデルがあったという。おそらく現在のオスマン朝のシタデルとほ

ぼ同じ場所にあったと考えられる。十字軍時代のシタデルは、町の南に位置していた港と水路でつながっており、シタデルと港にあった城塞との間は舟で行き来できたという。シタデルの東は、平野であり、そこで生産されるワインは名高いもので、町での需要を満たしていたとされる。

ボトルムは、レヴァント地方に建設された四つの十字軍国家のうち最後に建国されたトリポリ伯国(1102~1289年)の支配下にあったとされる。この国家は、海洋国家で絹の錦織やラシャなどが特産物として知られ、ジェノヴァやヴェネツィアなどとも交易をおこなったとされる。

ボトルムも小規模ながら良港をもつ港町として交易に参加していた可能性は高い。ただ、トリポリ伯国の支配下が安定していたかというところでもない。例えば、1187年7月には、サラフッディーンの攻撃により、トリポリ伯国内のボドルムは、エルサレム王国内の他の地中海沿岸部の町々とともに、ティールを除き制圧されたと記録にある。

1289年にトリポリがマムルーク朝のカラーウーンの攻撃で陥落すると、ボドルムもイスラーム王朝の支配下にはいったとされるが、この前後から15世紀までのバトルーンに関する文献史料はほとんどないのが現状である。今後、十字軍時代の考古学資料がバトルーンの隠された歴史を解き明かす重要なカギとなることは明白だと思われる。

4. まとめ

2018年に開始したバトルーン遺跡の調査は、9シーズン目を迎えた。初期の調査は、鉄器時代からペルシア時代を中心としていたが、現在は、ローマ時代からオスマン朝時代に焦点を当てた緊急調査が続いている。これにより、いわゆるフェニキア時代から現代までの長期的なスパンでバトルーンの歴史を復元する資料が得られていることは重要な意義がある。というのも、レバノンでは、沿岸部の遺跡は特に開発の波にさらされ、緊急調査は行われるものの、多くの遺跡が破壊されている現状がある。現在、レバノンが深刻な経済危機および治安の不安定化という歴史の波にもまれていることを考えると、少しでもレバノンの歴史を復元する貴重な考古学データを取得し、公開してゆくことはレバノンだけでなく、日本にとっても「自国の文化遺産を保護する」という目的を考える機会を与えてくれるのである。今後とも地道に作業を継続してゆきたいと

思っている。

さて、今回の調査は、十字軍時代からオスマン朝時代までのタイムスパンの遺構や遺物が出土した。十字軍時代の文化層は、これまで考古学的に明らかになったことはないものであり、今後、建築遺構の発見が望まれる。今回発見された「塔」は、オスマン朝時代後期に再利用されているものの、シタデルの位置からすると、十字軍の城塞も同じようなエリアにあった可能性が高い。調査区の試掘(東トレンチ)で大量の十字軍時代の土器や施釉陶器が発見されたことは、十字軍時代の居住層が明確にあったことを示唆する。

また、この時代の建造物がオスマン朝時代になって再利用されていることを考えると、中世の建造物は、その重要性を後世まで維持していた可能性がある。オスマン朝時代の考古学的成果についても今後着目してゆきたい。

バトルーン遺跡の発掘調査は、レバノン大学、中部大学、および個人出資者からの支援を受けて実施された。調査にあたっては、レバノン文化省考古総局のSarkis el-Khoury 総裁、同局北レバノン地域担当官Samar Karam 女史、および在バトルーンの考古総局職員の方々より多大なる支援をいただいた。発掘調査

では、Vilma Braidy Hanna(レバノン大学)、Mouhamad Abdel Sater(レバノン大学)、Nehme Abou Rjeily(レバノン大学)の協力を得た。この場をかりて関係諸氏に厚く御礼申し上げます。

■参考文献

- ・ J. Abdul Massih and S. Nishiyama 2023. *Batroun 1304 Excavation: DGA/LU/Chubu Japan* (Report submitted to the Lebanese DGA, December 2023).
- ・ 西山伸一、J. アブドゥル＝マッシーハ 2019「レヴァント回廊の歴史を語る―第4次(2018年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の試掘調査―」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』114-118頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一、J. アブドゥル＝マッシーハ 2020「レヴァント回廊の歴史を語る―第5次(2019年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の試掘調査―」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』35-39頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一、J. アブドゥル＝マッシーハ 2021「レヴァント回廊の歴史を語る―第6次(2020年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査―」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』41-46頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一、J. アブドゥル＝マッシーハ 2022「レヴァント回廊の歴史を語る―第7次(2021年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査―」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』38-42頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一、J. アブドゥル＝マッシーハ 2023「レヴァント回廊の歴史を語る―第8次(2022年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査―」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』119-123頁 日本西アジア考古学会。